

タイトル：色

学校名・学年：関西創価高等学校・2年

名前：妹尾 和美

(本文)

私には、誰からも愛される優しい兄がいます。兄は小さい頃から色覚に異常があり、見える色が私や周りの人と違っていました。私はそのことを知ってはいましたが、兄がどんな気持ちで日々を過ごしていたのか、深く考えたことはありませんでした。

小学生の頃、兄は図工の時間に「草は緑」「空は青」という当たり前の表現がうまくできないことがありました。ある日、兄が描いたカブトムシの絵が緑色で塗られていました。兄にとっては自然な色でも、周りの子どもや大人たちからは不自然で自分たちとは違うと認識してしまうはずです。周りの子たちからその絵について色々聞かれたらしく、その時の兄は笑ってごまかしていたそうですが、心の中では大きな孤独を感じていたのではないかと思います。私がもしその場にいたら、きっと兄の気持ちを守りたかった、と今になって強く思います。

外で遊ぶときも色覚異常は障がいとなります。例えば誰もが小さい頃やったことのある「色鬼」という遊びは、色を瞬時に見分けて走る遊びですが、色覚に障がいのある兄にとっては、自分は参加することのできない周りと一緒に楽しむことができない遊びになります。私にとっては小さい頃から身近にある当たり前の遊びだと思っていたし、その遊びをした中でできた楽しい思い出もたくさんあります。ですが、遊びという楽しい時間の中でも、兄のように障がいのある人にとっては取り残される瞬間があります。「ほんの些細なこと」と周りは思うかもしれませんが、しかし、周りに馴染めず周りとは違うと感じてしまった時には孤独感や劣等感を嫌でも味わってしまい、忘れることのできない思い出になってしまいます。

成長するにつれて、色の違いでの困難はさらに広がりました。友達と待ち合わせをするときに「赤い看板の前で」などと色で指定された時、見分けることができなかったり、学校のプリントや黒板に書かれるチョークの文字が赤色と青色と区別できなかったり。何色のものを取ってと指示をされてもこれも区別することが難しく手に取れなかったり。服を選ぶときには「これとこれ、どちらが似合うかな」と聞かれても、色合いを判断できずに悩んでしまうことも多かったといえます。私が兄からその話を聞いたとき、自分が想像していた以上に日常生活に影響があることを知り、自分の色覚異常に対する浅はかな考えに胸が締めつけられるような思いがしました。

「色覚異常はほかの障がいに比べ小さな障がい」と周りに思われがちです。しかし実際には、信号、プリント、地図、掲示物、服、看板。色は日常のあらゆる場所に存在し、避けて通ることはできません。だからこそ、その中で不便を感じない日は一日もないはずです。色は誰にとっても当たり前にそこにあるものですが、兄にとってはいつも挑戦の対象だったのです。私はそのことに気づき、これまで兄の心の痛みを十分に想像できていなかった自分

を恥ずかしく思いました。

それでも兄の笑顔を絶やさず、人に優しく接する兄の姿は、私にとって誇りであり尊敬をしています。周りから「明るいね」「誰とでも仲良くできるね」と言われる兄は、本当は数えきれない苦労や悔しさを乗り越えてきたからこそ、人の気持ちを深く理解できるようになったのだと思います。兄は、自分が孤独を感じた分だけ、人に孤独を感じさせまいとするように接しています。その姿は、何よりも強く、そして温かいと感じます。

私はそんな兄から、「障がいとは何か」ということを考え直しました。障がいは、その人を弱くするものではありません。むしろ、周囲の理解や支えがあれば、その人の中にある強さや優しさをさらに引き出すものだと思います。兄を見ていると、障がいは「壁」ではなく、人と人をつなげる「橋」になり得るのだと気づきます。「共生社会」という言葉があります。障がいのある人となない人が互いを理解し合い、支え合って生きる社会のことです。兄の存在は、私にとってその共生社会のあり方を教えてくれる手本です。

私はこれからも兄と共に過ごす中で、違いを受け入れる優しさや、困難に立ち向かう強さを学んでいきたいと思います。そして、兄から受け取った学びを自分の周りの人たちにも伝えていきたいです。誰かが孤独を感じそうになったとき、私は兄のようにそっと寄り添える人間でありたい。そうすれば、私自身も「心の輪」を広げる一員になれると信じています。兄が教えてくれたことは、何よりも「人の価値はできることの数ではなく心の在り方で決まる」ということです。その気づきを胸に、私は障がいのある人もない人も共に輝ける社会をつくっていききたいと強く願っています。